令和２年２月号

日誌が語る「2・26」の東京概況

※日誌＜後藤新平伯傳記編纂会日誌＞

【後藤新平伯伝記編纂会】

◎昭和６年４月、市政会館に事務所を置き、編纂準備に着手

《会長》斎藤實　《顧問》伊藤巳代治、石黒忠悳、犬養毅、若槻禮次郎、阪谷芳郎

《理事》池田宏、服部金太郎、新渡戸稲造、堀啓次郎、賀来佐賀太郎、田中清次郎
永田秀次郎、長尾半平、長與又郎、上田恭輔、増田次郎、児玉秀雄

◎昭和７年２月、編纂委員が決定

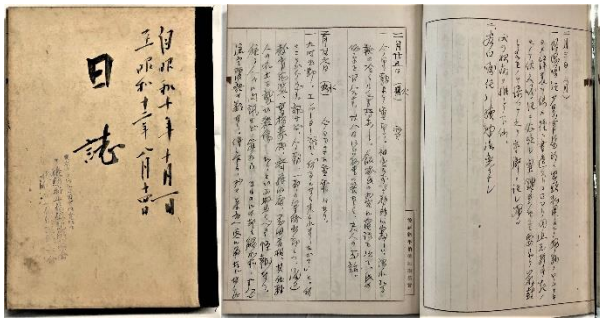
《理事》池田、新渡戸、賀来、田中、永田、上田

《委員》岩永裕吉、田島道治、鶴見祐輔、前田多門、清野謙次、菊池忠三郎

《執筆》鶴見祐輔　《会の実務幹事》田邊定義（辞任後、田中理事）、新名直和

◎昭和 12 年４月 13 日　後藤新平≪三秀舎≫後藤新平伯傳編纂会　出版

昭和12年発行の初版本



標記講座（３回シリーズ）の２回目が、２月 16 日（日）、えさし郷土文化館で開催されました。そこで、市教委歴史遺産課の高橋和孝学芸員から、解説資料として展示していた「後藤新平伯傳記編纂会」の日誌の解説がありました。

同日誌は全４冊で、第４冊（1935～37 年）に、36 年２月に発生した二・二六事件当日の東京の概況を記した内容も含まれています。

高橋　学芸員

高橋学芸員によると、「この日誌は、新平に直接関わらないため、研究者に注目されてこなかったもの。昭和の軍事史といったように視点を変えると、非常に貴重な資料となる。また、資料群の性格を物語る上でも大切なものといえる。今後も市所蔵資料の価値や内容について丹念に再調査していきたい」と話している。

（地元紙「胆江日日」取材回答）

【二月廿六日（水）】今日もまた雪霏々たり

九時出勤。エレベーターボーイ、「何事もなく来られましたか？」と。何のことか分からず。訊せば、今朝、一部の軍隊出動して、渡辺教育総監、高橋蔵相、斉藤内府、岡田首相、其他数人の名士を襲ひ殺傷したりといふ驚くべき怪報なり。種々人々に問訊せど、真相らしきものには却々触れず、すべて流言蜚語の類なり。併し乍ら、デマとは云え兎に角ただならぬ世上の模様、不安と昂奮とに心落ちつかず。仕事も手につかず。さりとて弥次馬となりて様子を確めるほどの気持ちも起きず。また、事件の中心地と目されたる一帯はすべて交通遮断、機関銃を据えつけたる兵士、街上に警戒線を張れりと。

四時早々退室す。雪尚やまず。

【二月廿七日（木）】今日もまた雪

九時半出勤。穂積氏来室。ニュースまた一しきりなり。未だ真相詳かならず。ただ事件の外貌やや明確したるのみ。丸菱の積君来り、マタ新しきデマ（？）をきく。（中略）不安と無味と、妙な気持なり。

今日も亦殆ど仕事手につかず。

【二月廿八日（金）】雪

新橋に下車して初めて事件の重大性を目撃したり。物々しき武装軍（戒厳部隊）機銃を据え、鹿寨を組み、永田町を包囲したるの隊形にて厳然として警戒せり。愈々武力鎮圧を決心したるにや。事務所に到ることを得ず、即ち、あちこち警備線を潜りて漸く事務所に入る。会館に殆ど人影を見ず。（中略）予と五人にて不安と昂奮と弥次馬性を交へて話す。十時前、交番より巡査来り、退去方を慫慂す。思ふに萬一交戦にも至らば、本会館は何としても危険なる場所なり。即ち一同申合せて帰途につく。雪尚降りしきる。大阪ビルの屋上、機銃を構へて兵二人、ぢっと動かず。凄惨なる帝都の光景なり。

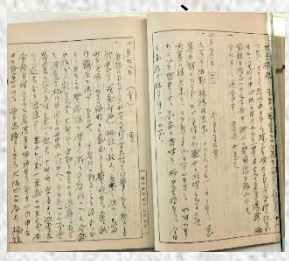
【二月廿九日（土）】雪、降り、また已む

一切の交通機関杜絶、即ち休むことにせり。

【三月一日（日）】

二十九日午后、遂に叛乱軍鎮圧せり。但し、一の発砲なく帰順せしめたるなり。

岡田首相は厄を免れたりと、奇蹟！



二・二六事件で反乱軍の兵士たちと話す青年将校の一人・丹羽誠忠中尉（毎日新聞）